

教師を育てた 言葉たち

No. 011

東京都・私立 共栄学園中学高校 杉山晴彦先生

すぎやま・はるひこ

◎教職歴 30 年。同校に赴任して 31 年目。
進路指導部長。

東京都・私立共栄学園中学高校 全日制/
普通科/共学/1学年約320人/2018年
度入試合格実績(現浪計):国公立大は、千
葉大、埼玉大などに6人が合格。私立大は、
上智大、津田塾大、東京理科大、明治大、
早稲田大などに延べ438人が合格。



教 師になって10年目に参加した研修で、講師から「**阻害要因は内に求めよ**」という言葉聞いた時は、まさに目からうろこが落ちる思いでした。

当時の私は、教師としての自信を持ち始めた時期でした。ただ同時に、物事が思うように進まない時、その要因を自分以外の他者に求めることが増えていたように思います。成績が低迷する生徒に対しては「これだけ授業やプリントを工夫しているのに……」と生徒の側に要因があると考え、校内会議で私の提案に首を縦に振らない先輩や同僚に対しては「頭が固い!」と反発する。自分は正しいという思いが強くなるほど、苦しくなっていく状況でした。

ある先輩からは「杉山先生の言っていることは確かに正しい。でも、正しいと分かっている、人は動くとは限らないんだよ」と諭されたこともありました。実際、理路整然と説明したつもりなのに、「うーん」と唸るだけで沈黙してしまう相手を前に、「理屈では動かないのであれば、一体どうすればよいのだろうか」と途方に暮れる経験もありました。だからこそ、「相手を変えようとするのではなく、自分の考え方や行動、表現の仕方などに原因を求めて自分自身を変えることで、結果的に物事が進む」という講師の教えを、私は素直に受け入れ、すぐに実践してみることができたのです。

宿 題をしてこなかった生徒には、叱るという行為以外に自分に何ができるのかを考えました。そもそも生徒は、宿題をしてこなかったことに自責

の念を抱いています。しかし、私が強く叱ることで、宿題をしてこなかったこと以上に、叱られたことに意識が向いてしまい、自分を変えようという思いが深まらないのではないか……私は生徒を頭ごなしに叱るのではなく、まずは「どうしたの?」と理由を尋ねるようになりました。自分を見つめる時間が与えられたことで、生徒たちは自分の中にある阻害要因に向き合い、ゆっくりとですが、変化していきました。

会議で提案が通らない時は、相手を非難するのではなく、内容の再検討へと気持ちを切り替え、企画書をいつ、誰に、どんなタイミングで出すのかも見直しました。反対意見を「自分の考えをさらに磨いていくための材料」と前向きに捉えることで、次第に校内の議論が楽しくなっていました。

また最近、私は思わぬ阻害要因を発見しました。ここ数年、生徒同士の対話を重視した授業を行うようになって、生徒自身が対話の中で自分の理解を妨げていた阻害要因に気づく場面を多く目にするようになりました。もしかしたら、私たちが教えすぎることが、生徒の理解にとっての最大の阻害要因だったのかもしれない。

人 を変えることは確かに難しいけれど、「どうせ変わらない」と変化を諦めることは私たち教師にはできません。私が、自分が変わることを選んだのは、他者の変化を諦めないためでもあります。そして、一人ひとりの教師が少しずつ変わることによって、学校という組織もまた変わっていくのだと思います。